国際派仏教者、宇津木二秀とその時代

吉永進一[1]、中川未来[2]、大澤広嗣[3]

要旨：宇津木二秀（1893～1951）は西本願寺の僧侶であり、龍谷大学などで教鞭をとった英文学者である。大乗協会や神智学の大乗ロッジの運営に携わり欧米人仏教者と接し、西本願寺の翻訳課主事として仏典、仏教書の英訳を行い、戦争直前には東南アジアへ調査旅行を行うなど、国際的に活躍した仏教者であり、その生涯は日本仏教の国際化を映し出す鏡でもある。本論文では、彼の経歴、資料の概要、そして神智学やアジアとの関わりについて論じる。

キーワード：William McGovern、M. T. Kirby、龍谷大学、大乗協会、神智学、興亜仏教協会

はじめに

宇津木二秀は、仏教史に登場することのほとんどない名前である。おそらく多くの読者はこの名前を初めて耳にされるであろうし、本論文の執筆者たちもまた同様であった。大澤は戦時期の仏教学者による南方調査の関係で、吉永は日本の神智学史の関係で、宇津木の名前のみは知ってはいたが、それ以上参照すべき資料はなかった。

2008（平成20）年6月、宇津木の住持した正徳寺の住所が判明し、大澤と吉永が同寺院を訪問したところから私たちの研究は始まった。同寺には、和本、和書、洋書、書簡、手稿、ノートなど、手つかずの資料が大量に残されていたのである。一瞥しただけでも、その資料が北摂地域の郷土史から東南アジア仏教にまでかかわる興味深いものであることが分かった。さらに『新佛教』研究会の研究者諸氏の協力で調査は円滑に進んできた。また。今年度からは新たに中川が参加して整理を行っている。とはいえ、時間的な制約などから、いまだ整理は完了するには至っておらず、私たちの前には宇津木の姿がぼんやりと浮かんできたに過ぎない。

今回の論文は、宇津木資料に関する調査の途中報告であり、今後、修正や補足が必要になってくることは言うまでもない。ただ、日本、アジア、欧米に及ぶ宇津木の活動範囲を考えると、少数の研究者だけでは宇津木をめぐる時代の様相、仏教近代化の問題などは見えてこないであろう。そこで識者のご批判やアドバイスを期待して、今回は中途半端な形ではあるが、論文発表に至った次第である。

1　舞鶴工業高等専門学校人文科学部門　准教授
2　京都大学大学院博士後期課程
3　文部科学事務官　文化庁文化部宗務課専門職

以下、本論文では、第1章で略歴、第2章で資料を概観的に紹介した上で、第3章と第4章で宇津木の国際的な活動について、「神智学」と「東南アジア調査」というふたつの話題から論じる。宇津木がどのような人物と交わったかをプロットしていくことによって、宇津木の姿が浮かびあがればいいかと思う。

執筆については、第1章は吉永が大澤と中川から提供された資料をまとめた形で執筆し、第2章は中川、第3章は吉永、第4章は大澤の、それぞれ担当である。

第1章　人物と略歴

宇津木二秀の略歴については、彼の書いた履歴書がいくつか資料の中に残っている。以下の略歴はそれを参考にしたが、ただし、いくつかの重要な事項はいまだ不明であることを予めお断りしておく。

彼は大阪府三島郡三箇牧村（現高槻市）西面の浄土真宗本願寺派正徳寺の第19代住職秀逸の次男として1893（明治26）年10月1日に生れた。西面（さいめ）は淀川に近い農業中心の集落で、正徳寺はその中心に位置する。幕末から戦前にかけては芥子の栽培も盛んであった。

正徳寺は15世紀末に真言宗の寺院として建てられたが、蓮如に帰依して真宗に変わり、その後、10代善応（1708年没）の頃から住職が住み着いたものとされている。15代、16代、18代と総持寺（地名）の光明寺から養子を貰っており同寺と関係が深い。光明寺の住職、遠藤秀善は後述の行信教校の校長を務める人物であり、二秀とは交流もあった[1]。

高槻市から茨木市にかけては、浄土真宗の盛んな地域であり、茨木別院（大谷派）や富田御坊と呼ばれた本照寺（本願寺派）などがある。明治期に入る

と真宗を中心に教育活動が盛んになり、1982（明治15）年には本照寺に行信教校（後に常見寺に移転）が開かれ、茨木の三徳学校のような、英語を中心とした普通学を教授する教育機関が仏教寺院の協力で開設されている。この三徳学校には、明治22年の神智学協会々長オルコットの来日に際してインドへ渡った野口善四郎（復堂）が英語教員をしていたともいう。宇津木二秀は書簡中で野口を「おじ」と述べており[2]、野口の存在や仏教系教育の存在が、宇津木の国際的活躍の原点であった可能性もある。

二秀は茨木中学校（現在の茨木高校）に学び、1912（明治45）年卒業と同時に仏教大学（現在、龍谷大学）に入学している。この前年に兄秀諦が早逝し、1914（大正3）年、予科2年生の時に父親が亡くなり、母一人、子一人になっている。

仏教大学は1639年に西本願寺内に開かれた学寮を淵源としているが、近代的な学校制度としては明治18年に開設された普通教校がある。この学校は、普通学とりわけ英語教育を重視し、寺院の子弟だけでなく俗人の入学も認めていた。ここを基盤に仏教の綱紀粛正運動である反省会や、海外への文書伝道を目指した海外宣教会が起こる。従前から存在していた僧侶養成機関は保守的になりがちであったのに対して普通教校は進歩的、国際的な学風であった。その後、普通教校は文学寮に改称、宗学教育を行う大学林と合併し1900（明治33）年に仏教大学としてまとめられる。しかし1902（明治35）年に一旦、普通学を重視した東京の高輪仏教大学と、宗学重視の京都の仏教専門学校に分離し、再び歳費削減という理由で両者は1904（明治37）年に京都に統合される。僅か2年しか存在しなかったが、高輪仏教大学はリベラルアーツを充実させ、上田敏や波多野精一も教員に迎えている。教育だけでなく国際的な仏教活動にも力を入れ、1902（明治35）年には、この大学で万国仏教青年連合会が発足している（この際、後に宗教人類学者となる宇野円空も一学生として参加している[3]）。たとえばカルピスの三島海雲が文学寮、高輪仏教大の出身者であるが、彼が示すように仏教系の教育機関にしてはかなり意欲的なものであったが、光瑞が新法主に就任して早々に高輪仏教大学は廃止されている。ただ、廃止はされたが、その進歩的、国際的な学風は仏教大学にも残っていた。

宇津木に話を戻せば、彼の資料には大学時代のノート類が残っており、その中には宇野円空の宗教史、薗田宗恵の日本仏教史も含まれている。英語の恩師は確定できないが、平安中学の教員でもあった埜上駁道（かくどう）と近かったようである。

学生時代で特筆すべき事件は、平安中学の教員ウィリアム・モンゴメリー・マクガヴァン(William Montgomery McGovern)（1897-1964）と出会ったことであろう。マクガヴァンはアメリカ人で、来日後、平安中学に教員として勤めながら、1915（大正4）年春、やはり平安中学教員M・T・カービー(M.T.Kirby)や埜上らと共に、大乗協会（Mahayana Association）を結成している。会員には宇津木のような学生、埜上、薗田宗恵、宇野円空、南條文雄、羽渓了諦、松本文三郎らの学者、欧米の仏教研究者が名を連ねていた。京都帝大で松本に学び、1915（大正4）年6月から本願寺派の開教師としてロサンゼルスに派遣されていた二十二（じそうじ）鉄鎧の名前もある。二十二は開教師を兼ねて南カリフォルニア大に留学し修士号を取得して帰国、そのまま龍谷大学の教員（社会学）となっている。渡米、留学では、宇津木の2年先輩に当たる。渡米前にマクガヴァンから英語のレッスンを受けている[4]ので、大乗協会にはその関係で入ったと思われる。鈴木大拙は名簿にはないがマクガヴァンと面識があり[5]、大拙の妻ビアトリス（Beatrice Suzuki）と義母エマ・アースキン・ハーン（Emma Erskine Hahn）は会員であった。宇津木資料中に、同会の名簿（資料no.10644）が残されているところから、宇津木はこの会の実務を担当していたと思われる。また学生でありながら、少なくとも2本の記事を寄稿しており、宇津木の優秀さがうかがえる。欧米人中心であり、しかも欧米で評価されていた上座部仏教ではなく大乗仏教の啓蒙を目的としたという点で、前例を見ない団体であった。ウィリアムの母ジャネット・マクガヴァンのように神智学経由で仏教を知った者（後述）や、カービーのようにキリスト教経由で仏教に入った者など、さまざまな欧米人の仏教への関心を直接知ることになる。また年齢も近いこともあり、マクガヴァンやカービーとは、その後も長く親交を続けた。この協会とマクガヴァンという人物については別稿[6]で論じることにしたい。

1917（大正6）年、宇津木は薗田宗恵のアメリカ視察に随行して渡米し、そのまま本願寺海外研究生としてアメリカにとどまる。留学費用捻出のために土地を売ったという話が残っているので、かなりの出費であったようである。興味深いのは渡米後1年間、ハリウッドの「高等学校大学予備科」で語学研修を受けている間、同地のクロトナ神智学々院（Krotona Institute of Theosophy）に参加したことである。これが、帰国後の、鈴木大拙夫妻との神智学活動につながっていくが、これについては後述する。翌年南カリフォルニア大学東洋科3年に編入し、1920（大正9）年7月に修了している。同年9月にイギリスに渡り、ロンドン大学にて英文科の講義を聴講。また11月より翌年10月までロンドン大学東洋研究科日本語講師を勤めている。1922（大正11）年12月よりヨーロッパを旅行、1923（大正12）年3

月に帰国し、同年4月からは龍谷大学予科の講師に任じられている。おそらくは留学中（あるいは前）から決定していた人事であったろう。さらにこの翌年の5月から大拙夫妻らと共に神智学の大乗ロッジを結成している。

大学の方は、1925（大正14）年4月に予科教授、1928（昭和3）年4月に専門部教授と順調に昇進しているにもかかわらず、1929年（昭和4）年7月には龍谷大学を辞職している。これには次のような事情があった[7]。まず1923（大正12）年に龍谷大学教授、野々村直太郎の浄土教批判事件が起っている。野々村が『中外日報』に連載した浄土教批判を不快とした本山は、野々村に対して同年8月奪度牒（僧籍剥奪）の処分を下し、それだけでなく龍谷大学に教授解任を迫っている。これに対して森川智徳らの教員が学問の自由を守れと主張、当時の前田慧雲学長は教授会を開き、教授会は満場一致で野々村の解職を認めないという決議を行った。結局、野々村は立命館に移り、この騒動は一旦は収まる。しかし、1929（昭和4）年になって、前田の後任学長をめぐって理事会と教授会の間に対立が生じ、学生からも理事会批判があがり、授業ボイコットの実力行使に出たため事態は紛糾する。学生たちは復学するが、7月になって自由派の森川智徳と梅原真隆が辞職、これに続いて11名の教員も辞職したが、宇津木、埜上も同時に辞職している。宗門の意向と大学の自治の対立という高輪仏教大学事件にも共通する構図であり、しかもどちらにも前田慧雲が関与していた。

ただし、これは宇津木のキャリアにとって致命的な事件とはならかったようで、1930（昭和5）年4月には西本願寺系列の大阪の相愛女子専門学校の教授に就任している。その後、1934（昭和9）年11月30日付の本願寺執行所出仕の辞令が出ており、それと同時に相愛女専を辞職している。琵琶湖ホテルの外事課主任に就任し、2年間ホテルマンを経験している[8]が、この間の事情はよく分からない。1936（昭和11）年5月には「日本仏教ト文化ヲ海外ニ宣伝」することを目的とする西本願寺翻訳課の主事に就任している。1937（昭和12）年12月より翌年4月まで、「同朋慰問布教並ニ教勢視察」のためにハワイに出張。同年には、来日したマクガヴァンと再会を果たしている[9]。

1941（昭和16）年2月には龍谷大学専門部教授に復帰している。ただ同年3月には興亜仏教協会より仏領インドシナ及びタイに派遣されているので、そのための肩書きであったのかもしれない。翌年1月には翻訳課から興亜部に異動している。1943（昭和18）年には、香港でキリスト教徒の平岡貞と共に「宗教懇談会」を設立している。このころ広東語と日本語の辞書である『粤日辞典』の刊行を計画していた。戦前から戦中にかけての宇津木と東南アジアとの関係については、第4章で述べたい。

終戦と共に一旦香港の捕虜収容所に収容された後、帰国している。遅くとも1949（昭和24）年には龍谷大学の教壇に復帰している[10]。盟休事件で辞職した森川智徳が戦後、学長に復帰していたこともプラスに働いたであろうし、何より英語教師が必要とされた時代でもある。

1947（昭和22）年4月5日には地元、三箇牧の村長[11]になりGHQとの交渉にあたり、1951（昭和26）年1月に同村長を辞して、7月17日に亡くなっている。

以上の経歴から分かるように、宇津木は仏教学者や思想家というよりは、語学教師や翻訳家として優れていた。また実務面での手腕が優れていたことは、ホテルマンから村長までを勤めたところからも明らかであろう。英語力と実務能力に長けた宇津木が本願寺が重用されていたことは、翻訳課勤務後にハワイ、東南アジア、香港と3度に渡って海外に派遣されていることからも分かる。

彼の業績としては、英文仏教書がある。英訳阿弥陀経、英訳正信偈などがある。日本語の単著はないが、雑誌や新聞記事、論文などの短いものを書き残している。

宇津木は、西本願寺の近代化された教育システムの中で育った人材である。普通教校から高輪仏教大学を経て龍谷大学へ流れ込んでいる自由派あるいは国際派ともいうべき系譜に位置づけられるであろうか。しかし彼は独創的な思想の人ではなく、実務と組織の人でもある。さまざまな国籍のさまざまな人間とつきあいを持った彼は、人脈作りの名人でもあった。その生涯は、近代仏教の最前線を映し出す鏡といえよう。

第2章　「宇津木二秀関係資料」について

本章では現在整理中の「宇津木二秀関係資料」について、今後の研究にあたっての便宜を図るため、その内容上の特徴をごく概括的に紹介したい。

本資料の内容は、第1章で詳述されているように多岐に亘る宇津木二秀の活動を反映しており、その点数は1263点に上っている。各資料の作成年代は1900年代から1950年代までの時期に分布し、時期によって程度の差はあるものの概ね宇津木の中学校時代から晩年までの生涯を網羅しているといえる。資料の種類は、宇津木の作成に関わる日記や各種草稿・書類・講義筆記ノート類、宇津木宛の書簡、神智学協会関係の刊行物など冊子類、辞令、寺務関係書類、写真などである。なお以上の資料の他に、宇津木の蔵書や書画類・写真帳・名刺・辞典作成用カード類の存在が確認されているが、本章が記述の対

象とするものは、整理がほぼ終了し仮目録を作成した範囲に止まることをお断りしておく。資料点数は2010年末現在の数値である。

資料の整理にあたっては、資料の内容と形態によって次のように分類した。（Ⅰ）自筆書類、（Ⅱ）書類、（Ⅲ）冊子、（Ⅳ）書簡、（Ⅴ）写真、（Ⅵ）その他。以下ではこの類別に従い各主題別の資料傾向を述べることで、内容上の特徴について紹介したい。

（Ⅰ）自筆書類

本主題は、宇津木二秀が作成した文書類である。点数は255点。内容は日記・手帳類、原稿・草稿類、講義筆記ノート、書類などに大別できる。

日記・手帳類は、茨木中学校2年次の1908（明治41）年から死去の前年、1950（昭和25）年までが断続的に残存している。日記・手帳の記載状態には時期によって粗密がある。

中学校時代の『生徒日誌』(1909～1912)や作文「世界一周記」からは、後年の活動へつながる海外への萌芽的関心が窺える。1917（大正6）年より約5年に亘った欧米留学中の報告原稿(「戦後に於ける英国の宗教界」「羅府から倫敦へ」など）は本願寺留学生としての宇津木の問題意識が現れており、また1920年代の日記からは鈴木大拙夫妻訪問など、宇津木をめぐる人的交流と思想活動の具体像を確認できる。

海外での活動の記録は、1937（昭和12）年のハワイ出張時の「渡布雑記」、1941（昭和16）年のインドシナ半島・タイ視察に関わる「仏印旅行視察記　仏印ニ於ケル基督教ト高台教」「ビルマ私記」などが残存するが、1943（昭和18）年から敗戦時に至る香港での記録は確認されていない。

原稿・草稿類については既に一部触れたが、英文原稿は宇津木の英文著作 *The Shin Sect, Hymn of Faith*（ともに1937年）などに関するものが主である。また「仏印ノ宗教事情」は、1941（昭和16）年8月に財団法人日本放送協会の京都放送局より放送されたラジオ講演原稿である。

書類は、1930・40年代に作成された履歴書、「仏教専用英語研究 其壱 附開教使準備教育英語科目」など講義用書類、また「昭和十四年十一月十日 十二月十二日 ホワイト氏同行全国周遊旅行記録」などを含む。

講義筆記ノートは仏教大学在学時のものであり、各講義の内容を具体的に検討することができる。

（Ⅱ）書類

点数は175点。各種書類や辞令類など宇津木以外の作成に関わる書類を収めたが、宇津木の講演速記が掲載された雑誌の抜刷なども含まれる。本主題の辞令類、（Ⅰ）の履歴書、更に公刊の大学史や仏教年鑑類を併せて参照することで宇津木の公的履歴が概ね明らかとなる。

辞令類は、仏教大学長・薗田宗恵の米国視察随行（1917年5月3日付）から、本願寺興亜部勤務（1942年1月7日付）までが残存している。また宗務員等級（親授一等など）叙任状や表章状（「本山法要並ニ支那事変ニ関シ功労不少」）などは各時期の教団内部における宇津木の位置を示している。

大乗協会・神智学関係では、「大正五年十月調 大乗協会々員名簿」（大乗協会事務所）、「神霊智学会趣意書」（1924年ヵ）がそれぞれ組織形態と思想を示す資料として重要である。

また1923（大正12）年に設立された欧文仏書編纂会を母胎とする西本願寺翻訳課（1936年開設）に関する沿革書類「本派本願寺翻訳課」からは、宇津木が主事を務めた同課の具体的な活動内容を確認できる。

Honpa Hongwanji mission of Hawaii（ハワイ教会名簿、1937年2月）などハワイ開教区視察関係書類、また外務大臣松岡洋右宛「南方仏教親善使節派遣方御許可御願」（興亜仏教協会、1940年8月26日）や「仏教を通じて行ふ宗教文化工作の具体案（仏領印度支那)」、「講演速記　仏領印度の近況　宇津木二秀氏談」（『白光』第35号、1941年11月）などインドシナとタイ派遣に関する書類も本主題に収めた。

その他、三島郡・正徳寺における活動を示す資料として1935（昭和10）年に開設された正徳寺日曜学校の日誌類が存在する。しかし1947（昭和22）年4月より1951（昭和26）年まで務めた三箇牧村長職に関する書類は確認されていない。

（Ⅲ）冊子

本主題には雑誌やパンフレット類を収めた。点数は271点。その多くが英文冊子（神智学関係）であることが特徴である。シリーズとして点数が纏まっているものは、大乗協会機関誌 *The Mahayanist*[12]、Annie Besant の講義録 *Adyar popular lectures*[13]、Annie Besant、C. W. Leadbeater、F. Otto Schrader、H. S. Olcott、R. Herber Newton らが執筆した *Adyar Pamphlets*[14]、C. W. Leadbeater の *Australian Pamphlets*[15]が挙げられる。他に A. P. Warrington、Beatrice Suzuki、Georgina Jones Walton、L. W. Rogers らの著作が存在する。献辞が記入されている冊子も多く、本資料の書簡と今後の蔵書調査の結果を併せることで、宇津木の人脈・知的関心の拡がりを具体的に確認できる。

また宇津木二秀の著作は、*The Discourse on the Buddhist Paradise*(1923年)、*Buddhism in English*(1926年)、*Children's Story of Buddha*（1936年）、*Life of St. Shinran*(1937年)、*New Buddhist Catechism*(1939年)、

Buddhabhasita-Amitayuh-sutra（1941 年、初版 1924 年）が所蔵されている。西本願寺関係の英文出版物としては、他に二十二鉄鎧 *The Influence of Buddhism on Japanese National Ideals*（1925 年）、R. F. McDonald, *A Living Faith*（1938 年）、S. Alex White, *Why I am a Buddhist*（1941 年）などが挙げられる。

和文冊子の種類は多岐に亘るが、「護国排仏教勇士会創立宣言書 並規則、心得及跋書」、野口復堂『四十年前の印度旅行』、また『霊智学及霊智学協会の使命』や『朝鮮・満洲・台湾・南洋開教区駐在員氏名、北・中・南支布教総監部管下駐在員氏名、従軍布教師・支那留学生・宣撫官氏名一覧表』（1941 年ヵ）など宇津木の活動に関連する冊子が注目される。

（IV）書簡

葉書も含めて書簡として分類した。点数は 341 点であり、年代は 1910 年代から 1950 年代に亘っているが、1910 年代後半から 20 年代にかけての神智学関係者との英文書簡が最も多い。

主な差出人として A. P. Warrington、Beatrice Suzuki、Charles Radford、E. W. Everett、Edward Clarke、Jacqueline Bragdon、J. E. Bllam、Laila Mere、M. T. Kirby、Paul Carus、William McGovern、Margaret McGovern らの名前を挙げることができる。

また和文書簡では留学中の宇津木へ宛てた母・ミチの書簡が最も多い。ここでは他に今村恵猛、内田晃融、宇野圓空、野口復堂、花岡孝三郎、福島俊翁、北条恵実、森川智徳らの名を挙げるに留めるが、書簡全体の分析と他資料との照合を行い宇津木の交流圏とその具体像を把握することが今後の課題である。

一例として 1936（昭和 11）年に開教師として渡米し、後に Stockton Buddhist Church を主宰した北条恵実との関係を紹介したい。北条書簡は 1940 年代後半から 50 年代にかけて分布しているが、本資料中には書簡の他に Stockton からの救恤物資配送記録や、Stockton Buddhist Church の機関誌『聞光』（1946 年創刊）などが確認され、第二次世界大戦後の宇津木と北米開教団との関係の一端を窺うことができる。

（V）写真・（VI）その他

正徳寺所蔵の資料群中には、米国留学（クロトナ神智学協会）、神智学大乗ロッジ、ハワイ派遣、インドシナ・タイ視察などに関する写真帳の存在が確認されているが、（V）「写真」にはそれ以外の写真を収めた。1915（大正 4）年の「殿試受験紀年撮影」写真から、1940 年代にかけての 54 点である。各種会合における記念写真の他に、僧衣の Allex White 夫妻、William McGovern の肖像写真などが存在する。

また（VI）「その他」には以上の分類には入りきらない資料 167 点を収録した。各種新聞切抜（英字紙含む）や未使用絵葉書、地図・ガイドブック類が多くを占めている。

以上概観したように本資料は、従来必ずしも明らかではなかった宇津木二秀の活動に関する一次史料及び周辺史料を数多く含み、他章でそれぞれ具体的に検討されるように近代仏教の国際的性格や南方関与の歴史を考察する上で貴重な資料であるといえる。

また地域（大阪府三島郡）と知識人・宇津木二秀の関係という視点からは、正徳寺を中心とする知的水脈の拡がり（三島郡仏教和合会・日曜学校・檀家子弟への影響）を読みとることも可能であろう。

本資料の活用によって、近代日本における仏教者の役割や実態が解明されることを期待したい。

第 3 章　大乗協会から大乗ロッジへ

宇津木は生涯に渡って海外仏教者との交流を持ったが、アジア仏教との関係と並んで重要と思われるものが欧米神智学徒との交流である。ここでは宇津木本人というより、宇津木を取り巻く神智学運動の状況や歴史と仏教との関係を、大乗協会、クロトナ神智学々院、そして大乗ロッジに分けて論じておくことで、彼の経歴を浮かび上がらせてみたい。

3－1　大乗協会 Mahayana Association

大乗協会自体は、組織的にも思想的にも神智学と直接の関係はない。機関誌 *Mahayanist* 誌に最も多くの記事を寄稿していたのはマクガヴァンであるが、基本的には鈴木大拙の大乗仏教説を下敷きにし、キリスト教との対比によって大乗仏教を解説した記事が多く、神智学用語は確認されない。また、彼の経歴にも神智学との関係は見当たらない。ただし、ウィリアムの母親、ジャネット・B・マクガヴァン（Janet B. McGovern）は神智学徒であった。ジャネットの名前は会員名簿には記載されていないが、*Mahayanist* に少なくとも 3 本の記事を寄稿しており、1915 年の大乗協会設立当時は京都に滞在している。彼女はジャーナリストで同時に神智学徒、アマチュア人類学者でもあった[16]。1912 年、ウォリントンが率いるアメリカ神智学協会の秘教部に加入し、さらには神智学協会と競合していた秘教団体 Oriental Esoteric Head Center に参加して、機関誌の編集者も勤めていた[17]。1914（もしくは 13）年来日し、日本で英語教師をしていた。ウィリアムは、当然、母親を通じて秘教的な仏教観を知っていたと思われるが、その影響は見当たらない。

ただし、この当時、欧米仏教者の多くは神智学に関係があり、大乗協会の会員にも神智学徒が含まれていた。大正 5 年当時の同協会名簿には、アディヤールの神智学協会で発行されていた *Theosophist* 誌、

ロンドンで発行されていた *Quest* 誌、そしてクロトナ神智学々院のウォリントンの名前もある。鈴木大拙夫人のビアトリスとその母エマ（当時アメリカ在住）も大乗協会に属していたが、この時点では神智学に参加していない。神智学に正式に加入するのは、後述の国際ロッジ結成時である。

意外な人物では、前出の開教師、二十二鉄鎧がいる。ロサンゼルスに赴任後間もなく、クロトナで講演を行うなど、ウォリントンと交流があったようである[18]。おそらく宇津木をクロトナの神智学協会に紹介したのは二十二ではなかったかと思われる。

3－2　クロトナ　Krotona Institute of Theosophy

1917（大正 6）年、薗田宗恵と共に渡米した宇津木は、9 月より 1 年間ハリウッド高等学校大学予備科に通う。その間、クロトナと呼ばれる神智学コロニーに滞在していたと思われる。

ここでクロトナ建設に至る、神智学運動の状況について簡単に触れておきたい。

20 世紀初頭、神智学協会は、アニー・ベサント、C・W・リードビーターを中心とするインド、アディヤールの神智学協会と、キャサリン・ティングリーの率いるアメリカの協会に分裂、対立していた。

後者はサンディエゴのポイントロマに本拠を有し、1897 年から「ロマランド」と呼ばれるコロニーの建設を開始、1910 年には 500 名ほどの住人が共同生活に入っていた。ここに移り住んだ住人は、そのほとんどが中流から上の階級出身者で、スポーツ用品で有名なA・G・スポールディングのような企業家も多かった[19]。

一方、前者のアディヤール派は、1909 年にリードビーターが「発見」したインド人少年クリシュナムルティを、来るべき「世界の教師」として、一種のメシア運動を起こしている。そのために 1911 年に別組織として「東方の星教団」（Order of the Star in the East）を結成して、欧米からアジアにかけて運動を拡大していった。この時期、キリスト教的な再臨思想の色合いが濃くなり、儀礼も整備されている。

クロトナの中心となった人物は、アルバート・パウエル・ウォリントン（Albert Powell Warrington）といい、1866 年メリーランド州に生まれる[20]。ヴァージニア大学で法律を学んで弁護士となり銀行の頭取に就任。1896 年に神智学協会（アディヤール）に加入。熱心な神智学徒で、特にベサントの忠実な弟子であった。また実務的手腕に長け、協会内部の問題解決に当たっている。その結果、1906 年 4 月にはベサントから「秘教部」（esoteric section）（神智学協会の内部組織）への参加を認められ、1912 年からアメリカの神智学協会の会長を務めている。ウォリントンはポイント・ロマのコロニーに刺激を受け、コロニーの建設を構想する。いくつかの候補から、彼はハリウッドの農場を選び、1911 年末に土地を購入し建設を開始する。古代のピタゴラス教団にあやかり、クロトナと命名、場所は後に有名なハリウッドサインが建てられる丘のふもとにあたる。それまでシカゴにあった神智学協会の本部機能をここに移し、最盛期には「オカルト寺院、霊的な蓮池、菜食レストラン、小さな礼拝所、大きなメタフィジカル図書館、ギリシャ劇場」があったという[21]。ポイント・ロマも同様であったが、神智学の本部は、単に東洋的、オカルト的な知識を広める拠点というだけでなく、演劇や音楽などの拠点でもあった。当時、南カリフォルニアには「文化人」と呼ばれる層は少なかったが、彼らが霊的な思想に関心が深かったことがクロトナの存在を可能にした[22]。

しかし、ウォリントンは 1920 年にアメリカ神智学協会の会長職を辞任、クロトナも 1926 年にオハイへ移転（なお現在はハリウッドヒルズと呼ばれる高級住宅街で、ここのコロニーに建てられたムーア風の建築物はかなりの数が残っている[23]）。またクリシュナムルティ運動は、29 年クリシュナムルティ本人が解散宣言を出して運動は頓挫している。ポイント・ロマの協会も、1929 年のティングレー死去と大恐慌が重なって大打撃を受けることになる。1920 年代末には神智学協会全体が衰退に向かうが、宇津木が渡米した時期は運動が拡大しつつある時期であり、ウォリントンの絶頂期であった。

宇津木が Rev. Shido（未詳）宛に出した 1918 年 5 月 30 日付英文手紙の写しが資料中に残っており、そこでは以下のように書いている[24]。

「クロトナ学院はどんどん大きくなっています。あなたが「完璧な淑女」と呼んでいるウォリントンの政策は、他の女神や悪魔を見事にコントロールしています。（中略）あなたもお母さんもご存知の方がこちらにはたくさんいます。クロトナで『アジアの光』（Light of Asia）を上演します。ウォルトン（Walton）さんが劇にしました。俳優はほとんどクロトナのメンバーです。7 月 2 日から 3 週間公演します」[25]。

仏陀伝の上演に際して仏教僧である彼が何か関与したのかは不明であるが、この手紙からすれば、宇津木はクロトナでの生活に溶け込んでいたようである。また、これに続けて何冊かの書籍名を挙げ、神智学の勉強にはげむ旨を書き送っている[26]。この時点で神智学書を組織的に読んでいた数少ない日本人であった。

3－3　神智学大乗ロッジ

宇津木は 1924（大正 13）年、京都で結成された神智学の支部「大乗ロッジ」（Mahayana Lodge）の創立

メンバーになっている。

このロッジについては1925（大正14）年6月10日の讀賣新聞には、「日支セオソヒスト提携」と題して、上海に出来たロッジが日本の「大乗靈智學会」に大拙の論文を求めてきたという記事が掲載されている。また、『鈴木大拙――人と思想』（岩波書店、1971）中に断片的な情報が残っている。寿岳文章は「家庭人としての大拙居士」中で、ビアトリス夫人が東方の星教団の支部を自宅に置いていて、「薄気味悪い結社」の集まりがあったと書いている。他方、羽渓了諦の「京都時代の大拙博士」によると、大拙の邸宅に神智学協会の支部を設け、毎月一回、大拙夫妻を中心にいろいろなテーマについて英語で討議したとある。さらに今日出海が、父親、武平と大拙の交流について思い出を書いている。

とはいえ、A・アルジオ（Adele S. Algeo）がアディヤールの協会に残るビアトリスの書簡を翻刻紹介するまでは、ほとんど正体不明の組織であった。現在もなお彼女の論文[27]がほぼ唯一の情報源であるので、以下にアルジオ論文の内容をまとめておく。

アディヤール派の運動が日本で本格的に開始されたのは、1920（大正9）年2月、当時慶応大の教授だったアイルランド人詩人ジェイムズ・カズンズと今東光の父親、今武平を中心として東京に「国際ロッジ」が組織されてからである。カズンズは間もなく離日して、そこに大拙夫妻が参加している。今武平が辞任すると、鈴木大拙がロッジの会長になり、運営委員会のメンバーにはグランチャン・シン（G.C.Singh）[28]やジャック・ブリンクリー（Jack Brinkley）の名前も含まれる。このロッジは、その名のように在日外国人が中心である。しかし大谷大学への転出に伴い、大拙夫妻が1921年に京都に移り、他の会員も東京を離れて、このロッジは衰微していった。

ビアトリスがアディヤールの神智学協会本部宛に送った手紙は、1924（大正13）年6月22日付のものから1928（昭和3）年11月28日付のものまで6通残っている。

最初の手紙では、1924（大正13）年5月8日に、大拙夫妻、エマ・ハーン、宇津木二秀、二十二鉄鎧に3名の新会員が加わって、大乗ロッジ（Mahayana Lodge）が結成されたこと、6月14日に龍谷大学で第2回の会合が開かれ、さらに6名の新会員が加わり現在は計14名になっていること、大拙夫妻らは国際ロッジ結成時にすでに会員になり、宇津木と二十二はアメリカですでに入会しているので、新会員は計9名であるという報告がなされている。

その後、ビアトリスが本部に送った何通かの手紙に会員の出入りが記録されているが、以上の5名以外でロッジに籍を置いた人物を整理してみると、龍谷大関係者に、赤松智城、羽渓了諦、宇野円空、森川（おそらく森川智徳）、池田師（未詳、西本願寺関係者？）、大谷大関係者では、山辺習学、泉芳璟、寿岳文章、アベ（未詳、大谷大関係者？）がおり、その他、マツイ（未詳）、マルガレテ・マタイセン（Margarete Matthysen、未詳）、セチ日比野（Setti Line Hibino、植物学の日比野信一夫人）、エラ・ダーリントン（Ella Darlington、神戸在住、未詳）という名前があがっている。ロッジの人数は15名から12名というところであった。ロッジには会長を置かず、ビアトリス鈴木が書記（secretary）として運営の中心に当たり、宇津木二秀が会計を担当している。

1925（大正14）年11月9日付で本部に送った報告書では、東京にも新たにオルフェウス・ロッジ（Orpheus Lodge）が結成され、ラベルトン（D. Van Hinloofen Labberton、東京外語学校教師）が会長を勤めていること、1924（大正13）年10月にオルフェウス・ロッジのサバルワル（Sarbarwal[29]、インド人ジャーナリスト、独立運動家）が大乗ロッジを訪問、11月にはラベルトンが訪問したと記されている。

寿岳が「薄気味悪い」と評した東方の星教団活動には、龍大や大谷大の教授たちはあまり興味を示さなかったようで、1927（昭和2）年12月にビアトリスは日比野夫人と二人でようやく東方の星教団活動を開始している（1928（昭和3）年2月1日付の手紙）。また、1928（昭和3）年には神智学と東方の星教団についての入門用小冊子（部数1000部）を発行し会員数増加を計っているとも手紙で書き送っている。しかし、こうした努力にもかかわらず、ロッジは1929（昭和4）年10月にカズンズ夫妻が日本再訪を最期として、それ以後の活動は確認されていない。

以上の点については、鈴木大拙の日々の行動をつぶさに追跡した桐田清秀編『鈴木大拙研究基礎資料』（松ヶ岡文庫、2005）からも確認できる。大拙は1920（大正9）年3月13日から6月26日まで6回神智学の会合に参加していると記録されているが、これは国際ロッジの会合であろう。大乗ロッジの会合は、1924（大正13）年5月8日より1929（昭和4）年10月6日まで17回記録されている。最後の10月6日はカズンズが訪問した際の会合であろう。また、大拙を訪問した外国人の中には、神智学徒と確認できる者もかなり含まれている。

足掛け5年間とはいえ、大乗ロッジは日本において神智学のロッジが持続的に活動した数少ない例である。

大乗ロッジを成立させた一つの要因は、ビアトリスの熱心さであった。アルジオが発掘した書簡から浮かぶのは、篤信の仏教者ではなく熱心な神智学徒の姿である。

ただし、大拙夫妻は今武平と在日外国人らによる

ロッジ結成の後を追って神智学に参加していることからすれば、ビアトリスの神智学への参加は、単なる求道精神の発露というよりは、神智学運動の世界的な隆盛の余波と見ることもできる。

さらに、夫妻は1921（大正10）年春に大谷大学教授就任に伴って京都へ移転しているが、3年間のブランクを経て、1924（大正13）年になって、神智学活動の再開に至っている。その間1921年4月には*Eastern Buddhist* 誌を創刊している。ビアトリスは*Eastern Buddhist* 誌発行の影の功労者とはよく言われるが、必ずしも同誌の活動だけで満足していなかったようであり、神智学協会々員との出会いを好機として、ロッジの運営に乗り出した。一方、大拙は神智学に対してスウェーデンボルグに見せたほどの熱心さは見られない[30]。1930年にビアトリス宛の手紙では、彼女の神智学熱に対しても冷ややかな批判を浴びせている[31]（ただしクリシュナムルティ運動が停止した後であるが）。

ロッジを成立させたもうひとつの条件は、学者たちとの人脈にあったが、それは大乗協会から受け継いだものである。大乗ロッジ会員のビアトリス、エマ・ハーン、宇津木、二十二、羽渓、宇野、泉は大乗協会の会員であった。大乗協会の人脈がなければ、ロッジ結成には至らなかったであろう。それもあって大乗ロッジは、羽渓が回想しているように、学者たちの知的な集まりという性格が強い。神智学の宣教拠点としたかったビアトリスは失望を感じていたのではないか。

1929年に大乗ロッジが活動を停止した最大の理由は、やはりクリシュナムルティの東方の星教団終了宣言があったからであろう。ただ、これがビアトリスにとって、どれだけの精神的衝撃であったかは不明である。クリシュナムルティの宣言が出されたとき、彼女は高野山で真言密教を学んでいる最中であった。

もっとも、この年は同時に龍谷大学では教員たちの辞職事件が起った年で、宇津木や森川が龍谷を去っている。さらに大谷大学でも、異安心問題に端を発して金子大栄の辞任（1928年）も起っている。大乗ロッジの会員ほとんどが龍谷、大谷の大学教員であった以上、そうした大学騒動の影響も無視できない。

宇津木資料を見ると、洋書の神智学協会パンフレットが多数残っており、中には日本語のものも混じっている。今武平が翻訳したクリシュナムルティ『阿羅漢道』（文党社、1925）は、ビアトリスから贈られたもので、彼女の署名入りである。今は、東方の星教団活動に挺身していた数少ない日本人である。また、昭和3年に発行された『霊智学及霊智学協会の使命』（資料 no.10647）も残されている。こちらも英文からの翻訳と思われるが、協会の歴史から、真理の探求、諸宗教の根本的な一体、「同朋」主義などの理念までを簡単にまとめたものである（Universal Brotherhood を「同朋」という真宗用語に置き換えてあるのは宇津木の訳語かと思われる[32]）。編集兼発行人は鈴木貞太郎、連絡先として東京のケーシー（E. Casey）、鈴木ビアトリス、宇津木二秀、今武平の名前が挙がっており、ここでも宇津木が実務の中心となっていた。

欧米人の仏教実践が神智学を土壌として展開したことは言うまでもないが、大乗協会は「仏教」が自立していく段階のひとつであった。宇津木が神智学協会に身を置いた背景には、近代仏教のそうした大きな流れの中があった。

それでは宇津木自身は神智学をどう考えていたのか。その点についてのまとまった資料は発見されていないが、執筆年代不明（帰国後執筆か）の「クロトーナ式典に就て」と題する原稿の一部が残されている（資料 no.10358）。「クロトーナ式典」とは、ウォリントンの考案した、諸宗教の融和を象徴する儀式のことである。この原稿で宇津木は、神智学の根本理念が、諸宗教の根底の統一性、新たな世界教師の出現にあると述べた上で、そうした理念を具体的に図示する手段が、この式典であったと説明している。その式典は「生温い」動機で生れたもので、「信仰の逆り」から生れたものではないと冷静に批評しつつも、アメリカにおける宗教間対話の風潮のひとつとして評価を下している。

宇津木は、第二次世界大戦中、香港で宗教懇談会を主宰することになり、宗教間の対話を身をもって実践することになる。そこでクロトナの理念や経験がどう生かされたかは、今後の調査と検討を待ちたい。

第4章　南方宗教事情調査

先述したように、「宇津木二秀関係資料」には、宇津木が東南アジアでの調査の際に収集した資料が多く含まれている。本章ではこの調査の概要を紹介する。なお大澤は、かつてこの調査について触れたことがあるが[33]、正徳寺で確認した新出資料も参照しながら述べてみたい。

4－1　調査の計画

宇津木は、伝統仏教教団の連合組織である興亜仏教協会（1941年3月に財団法人大日本仏教会に再編。現在の全日本仏教会）からの派遣で、仏教学者である大正大学教授の久野芳隆と共に、1941（昭和16）年にフランス領インドシナとタイを調査した。

調査の目的については、宇津木資料の中に、同協会が前年の1940年に作成した書類「南方仏教親善使

節派遣方御許可御願」（資料 no.11077）の写しが残されているので確認できる。長くなるが引用する。

昭和十五年八月廿六日
　東京市京橋区築地本願寺内／興亜仏教協会
外務大臣　松岡洋右閣下
　　南方仏教親善使節派遣方御許可御願

謹啓仕候
陳者世界大動乱の渦中にあつて世界新秩序建設の指導的史的使命を果遂すべき皇国日本は、この世界政策遂行大東亜共栄圏の確立と其の無限展開即ち支那事変処理と密接不可分関係にある南方政策推進の為めには、東亜民族共通の宗教として其の魂を救ひ、その文化を発達せしめたる仏教を通じて、南方諸国諸民族に対する広義思想工作に依つて、日本仏教徒の天業翼賛の誠を期する次第に有之候
就ては　皇紀二千六百年奉祝、南方に対する仏教親善文化発展等の名目の下に、進むで国策即応の高等政策遂行の為めに国策遂行団体たる本興亜仏教協会より、その基本宗派より一流の学者、有力者、又は留学青年僧侶等を選定して仏教親善使節班を組織し、急速に御当局の必要とせらるゝ各地域に向つて派遣せしめ、以つて仏教を通ずる国民外交思想戦遂行の実を挙げ度存候。何卒この衷情を御諒承の上特別の御詮議を以て速に派遣方御許可被成下深厚なる御高配を賜り度資料相添へ此段謹而得貴意申候　敬具

この書類には別添資料として「興亜仏教協会基本宗派実勢力表」があり、文部省宗教局が調査した仏教各宗派の寺院・教会所数、僧侶数、檀信徒数が転載されている。さらに「興亜仏教協会会則」もある。

興亜仏教協会では、派遣の許可が承認された後、1941 年 1 月 10 日に東京の築地本願寺で開催された理事会にて、フランス領インドシナへ宇野円空と久野芳隆、タイへ藤波大円と山本快竜、オランダ領東インドへ杉岡規道の派遣を決定した[34]。

ただしインドシナについては、宇野ではなく宇津木が派遣されることになった。派遣要員の変更直後に、宇津木は次のように語っている。

仏印の外に泰国へも行きます。実は僕も急な話でビツクリして居る程です。今夜（〔2 月〕二十二日）東京へ行つて打ち合せるつもりです。仏印にも泰国にも僕は相当知人をもつて居る。仏教の外国語翻訳やその他で自然と友人が出来たのであつて、今回この使節の一人に加へていただいたのを喜んで居ます。タイの文部大臣ですネ。あの人なんか日本へ来られたときは僕は大変にヂツコン〔昵懇〕にして頂いて居るなどたのしみにして居ます[35]。

宇野が、派遣を辞したのは、身辺が多忙であったのではなかろうか。東京帝国大学では、昭和 14 年頃から東洋文化研究所の設立が構想されたが、一時は見送られたものの、昭和 16 年 2 月 14 日に開催された評議会にて「東洋文化研究所及第二工学部設立ニ関スル件」が提案され学内での賛同を得た[36]。宇野は、1941 年 11 月 26 日に東京帝国大学東洋文化研究所が発足すると、同大学の文学部宗教学宗教史学科の助教授から研究所の教授として異動した。

つまり宇野は研究所の開設準備のため、長期間の不在を避けるべく、調査要員を辞退したのであろう。代わりに宇野の仏教大学での教え子で、人脈が広く語学に精通していた宇津木が推薦されたと考えられる。

4－2　調査の目的と旅程

宇津木資料には、「仏印、泰国視察旅行ノ要項」（資料 no.11087）と題して、「本派本願寺翻訳課」の用箋で書かれた、手書きの書類が残されている。旅行の目的は、次のとおりである。

一、目的　皇国ノ南方政策ノ大方針ニ順応シ仏印、泰国ノ宗教、教育及一般文化ヲ視察シ近キ将来ニ於ケル国カ振張ト教団発展ノ基礎的工作ヲナスニアリ　ソノ主要目的左記ノ如シ
イ、支那仏教〔大乗仏教〕、南方仏教〔上座仏教〕ノ交流ニヨル仏印ノ仏教現状ノ視察、及ビ其他宗教運動ノ視察
ロ、ハノイ極東学院関係ノ諸学者トノ交歓ト連絡
ハ、安南国王、カンボジヤ国王、泰国王トノ面謁
ニ、大寺院ノ高僧訪問ト将来ノ連絡
ホ、カソリツク教ノ教勢視察
ヘ、仏教徒ノ日本訪問勧誘
ト、青年学僧交換ノ方途打開等
タ、皇軍慰問及英霊追悼式挙行

実際の旅程については、帰国後の講演で手持ち資料として準備した「最近の仏印・泰事情」（資料 no. 11061）[37]などで確認できる。それによれば、1941 年 3 月 12 日正午、蓬莱丸（大阪商船所属）にて、神戸港を出航して、15 日午後 2 時、台湾の基隆に到着した。滞在中は台湾各地で地域事情を調査した。宇津木資料にある名刺群には、台北帝国大学文政学部

の教官である人類学者の移川子之蔵と東洋史学者の箭内健次、ならびに調査活動を行っていた台湾南方協会の複数の関係者が見えることから、日本における南方研究の拠点であった台湾にて、現地在住の有識者と接触して、南方事情を聴取していたと考えられる。

19日に基隆を出発して、厦門、汕頭、香港を経由して、23日に広東に着いた。現地では日本軍の要請により、慰問と英霊追悼式を挙行した。広東から河内（ハノイ）に移動して、フランス極東学院を訪問して、研究者と接触した。宇津木らは、文化工作の一環として、学院長で東洋学者のジョルジュ・セデス（George Coedès）から日本訪問の受諾を得たが、計画は実現しなかった。ハノイ男子初等学校校長であったチャン・チョン・キム（Trần Trọng Kim）の名刺が残されている。後にキムは、1945年3月の日本軍による明号作戦（フランスの植民地権力の解体を図るクーデタ）の後に、独立を宣言したバオダイ帝の指名により、親日政権の首相を務めた。また宇津木らは、複数の仏教者とも接触しており、例えば極東学院の助手で、北圻仏教会書記長のチャン・ヴァン・ジャプ（Trần Văn Giáp）がいる。宇津木資料には、フランス極東学院から刊行されたジャプの自著 *Le Bouddhisme en Annam*（1932）が、献辞を記して残されている。

インドシナでは、仏教やカトリック、新宗教運動であるカオダイ教の実態について調査した。収集した図書については、タイ語よりもベトナム語の文献が多く、そのうち宗教関係については、ベトナムの仏教に関する資料が目立つ。ベトナムは、東南アジア諸国のなかで漢字仏教圏に属する唯一の地域で、中国伝来の漢訳仏典を用いた大乗仏教を信奉する。宇津木は、浄土真宗僧侶であるため、禅と浄土教が融合したベトナム仏教に関心を寄せていたのであろう。

宇津木らは、バンコク、サイゴン、アンコールワット、ツーロン、ユエ、河内、広東、海口を経て、同年7月26日にバタビヤ丸（大阪商船所属）にて神戸港に到着した。全行程は137日、距離にして1万3000キロメートルで、旅費は5500円であった。

この調査には、陸軍参謀本部も関与していた。出発前にまとめられた「仏印視察」（資料 no.11087）と題して興亜仏教協会の用箋にて書かれた書類によれば、旅費が「金参千壱百円也」とあり、その内訳は、「一　金七百円也　参謀本部補助」「一　金九百円也　本会〔興亜仏教協会〕補助」「一　壱千五百円也　宗派〔浄土真宗本願寺派〕補助」であった。つまり仏教界のほか、陸軍からも調査旅費が提供されていたのである。

宇津木と共に調査に随行した久野芳隆は、1941年3月より8月まで陸軍参謀本部で謀略を担当する第二部第八課の嘱託（佐官待遇）の肩書を保有していたことが確認できるが[38]、宇津木も同等の資格を有していた可能がある。

4－3　調査の成果

宇津木らは、調査から帰国直後の1941（昭和16）年8月1日付で、陸軍参謀本部に『対仏印宗教思想工作ニ関スル現地基礎調査報告』なる機密報告書を提出した[39]。報告書は二部で構成され、第一編（宇津木担当）は、「第一章　高台教 Caodaisme」「第二章　仏印ニ於ケル基督教ニ就テ」「第三章　宗教的見地カラ評シタ仏印ノ民情」である。第二編（久野担当）は、「第四章　仏教ヲ中心トスル印度支那宗教統計」「第五章　印度支那ニ於ケル仏教ノ二大区分」であった。宇津木資料のなかに「仏印旅行視察記　仏印ニ於ケル基督教ト高台教」（資料 no.10636）と表題に記された謄写版の書類綴りがある。これは第一編の宇津木の担当部分を抜粋して、綴じたものである。

この他で一般に公開された調査の成果としては、宇津木にはカオダイ教に関する論文「高台教」がある[40]。構成を見ると、「一、安南の宗教的ジャングル」「二、高台教の創立」「三、「高台」の意義」「四、「大道三期普渡」の意義」「五、教義要旨」「六、信仰の対象と祭壇」「七、儀礼」「八、教団組織」「九、現状」「十、結語」である。

宇津木資料の中には、ベトナム語で書かれたカオダイ教に関する文献が複数ある。論文では、「高台教に就いて多少の文献を持帰つたが何分安南語で書いてあることゝて、今に研究を尽くさない。時期を見て更に詳しく報告するにして、こゝには唯その梗概を記すに止める」[41]とあり、末尾には脱稿日を示す「一六・一二・一五記」とある。つまり同年7月に帰国して約5か月後に記されたため、収集した資料を充分に活用できなかったことが推察される。

さて同論文の結論として、宇津木は次のように述べる。

> 尚一言附したいのは、以上の説明からも凡そ判断出来るやうに、高台教には印度の零智学と極めて相似した諸点がある。乃ち
> 一、ともに「革新仏教」と称する点
> 二、既成宗教の革正純化を企てる点
> 三、霊界との交渉に禅定に入ることを教ふる点
> 四、上級信者に禅室を設けてゐる点
> 五、同朋、博愛を強調する点
> 六、輪廻説の代わりに霊的進化説を立てる点
> 七、宗教的聖人のみならず、文豪、芸術家を尊崇する傾向ある点
> などより見て、この二者の間には成立的に看過

出来ぬ関係があるので無いか？　この点も将来の研究に俟つことにする[42]。

論文「高台教」において「霊智学」について言及した箇所は、この点のみである。また報告書『対仏印宗教思想工作ニ関スル現地基礎調査報告』においても、「高台教は霊智学 Theosophy ト極メテ相似シタ点ガ多イ」として、上記の趣旨と同じ7点を指摘している[43]

この後に宇津木は、カオダイ教について更なる研究成果を公表してはいないが、残されたノートや手書きの書類について分析が進めば、神智学を通過した宇津木によるカオダイ教理解について、手がかりが掴めるものと考えられる。

おわりに

鈴木大拙、忽滑谷快天、河口慧海といった個性豊かな国際派仏教者たちを第一世代とすれば、宇津木は第二世代である。第一世代ほどの独創性はないが、宗門組織の中で、海外への文書伝道や、海外からの訪問者への対応など、仏教を介した国際活動を日常的に継続することが重要となる。その点では宇津木は優れた人材であったのではないか。

また、宇津木の周囲には薗田宗恵や宇野圓空といった国際派の学者が多い。同じ進歩派の仏教者でも、普通教校や文学寮を経て宗門の外へ出て『新佛教』に集まる流れ（たとえば高島米峰など）と、櫻井義肇や高楠順次郎などは高輪佛教大学に拠る流れがあったが、宇津木は後者に属し、高輪派の末裔、あるいは西本願寺派近代教育の生え抜きということもできるのではないか。

彼はふたつの点で時代の「最前線」にいた。ひとつは、翻訳を通じて浄土真宗の文書伝道の実質的な担い手となり、大乗協会や神智学協会などを通じて仏教に関心を持つ欧米人と直接に交流したことである。もうひとつは、国策と連動して、アジアの宗教者たちと出会ったことである。人脈作りの名人でもあった宇津木の周辺には、さまざまな人々が行き交っていた。それらは彼の残した資料にまだ隠されたままである。いまだ十分に発掘されていない近代仏教の最前線が、宇津木の資料から明らかにされるであろう。

謝辞とお願い　調査に当たっては正徳寺現住職様ならびに母堂様より多大のご配慮、ご援助をいただきました。ここに記すと同時に深く感謝申し上げます。また科研「近代日本における知識人宗教運動の言説空間―『新佛教』の思想史・文化史的研究」（代表：吉永進一、研究課題番号：20320016）の援助、ならびに『新佛教』研究会会員諸氏の協力をいただいたことを感謝いたします。なお宇津木資料については、いまだ整理中であり、一般への公開を行っておりません。ご利用を希望される方は必ず吉永（yosinaga@maizuru-ct.ac.jp）までご連絡をお願いします。

＜附録＞宇津木二秀略年譜（作成・中川未来）

1893（明治26）年
10月1日、大阪府三島郡三箇牧村（現高槻市）大字西面にて父・秀逸、母ミチの次男として出生。生家・正徳寺は真宗本願寺派大阪教区島中組に属す。

1900（明治33）年
4月、小学校入学。

1907（明治40）年
4月、大阪府立茨木中学校（現茨木高校）入学。

1912（明治45）年
3月、茨木中学校卒業。4月、仏教大学（現龍谷大学）予科入学。

1914（大正3）年
3月20日、父の死去に伴い家督相続。同月、仏教大学予科卒業。4月、同大学本科入学。5月16日、得度。真宗本願寺派僧侶となる。同月22日、真宗本願寺派教師となる。11月25日、正徳寺住職となる。

1915（大正4）年
4月より英国人教師に就き語学個人教授を受ける（～1917年3月）。

1917（大正6）年
3月、仏教大学本科卒業。5月3日、仏教大学学長・薗田宗恵の米国視察随行が発令される。6月5日、日本を発つ。9月より「米国加州ハリウッド高等学校大学予備科」にて語学研究（～1918年7月）。この頃、同地の神智学学院（Krotona Institute of Theosophy）に参画。

1918（大正7）年
12月27日：「senior standing student」として南カリフォルニア大学東洋科（Oriental Course）に編入。

1919（大正8）年
4月23日、米国留学（英語英文学研究）が発令され本願寺海外留学生となる。

1920（大正 9）年
7 月、カリフォルニア大学東洋科修了。9 月 13 日、英国到着。ロンドン大学英文科聴講生として「十八世紀英文学界」「英語学史及言語学」を研究。11 月、ロンドン大学東洋研究科日本語講師となる（～1921 年 10 月）。

1921（大正 10）年
1 月 11 日、Buddhist Society of Great Britain & Ireland にて講演。演題「Mahayana Buddhism」。11 月頃までロンドン大学に在籍し、12 月よりヨーロッパ大陸（仏・独・伊など）視察旅行を行う。

1922（大正 11）年
3 月、帰国。31 日、得業から助教へ学階昇進。4 月 15 日、本願寺海外研究生を解かれる。

1923（大正 12）年
2 月、*The discourse on the Buddhist paradise*（英訳仏説浄土論）刊行。4 月 1 日、龍谷大学講師となり稟授三等に列せらる。同月 15 日、白無紋法衣終身着用許可（立教開教慶讃法要記念）。

1924（大正 13）年
8 月、*Buddhabhāsita-Amitāyuh-sūtra*（英訳阿弥陀経）刊行。11 月 22 日、結婚。この年、鈴木大拙夫妻を中心とする神智学大乗ロッジ（Mahayana Lodge）に参画。

1925（大正 14）年
3 月 10 日、大阪府三島郡仏教和合会講師嘱託。4 月 1 日、龍谷大学予科教授兼龍谷大学講師となる。11 月、稟授二等に列せらる。

1926（大正 15、昭和元）年
5 月、*Buddhism in English*（英語仏教）刊行。

1928（昭和 3）年
4 月 1 日、龍谷大学予科教授兼専門部教授となる。

1929（昭和 4）年
5 月 1 日、稟授一等に列せらる。7 月 15 日、龍谷大学「盟休事件」に際し、森川智徳・梅原真隆に続いて他 10 名の教授・講師と連袂し辞表提出。同月 20 日、依頼免本役並兼役。

1930（昭和 5）年
4 月、大阪相愛女子専門学校教授となる。

1931（昭和 6）年
9 月、高等教員免許（無試験検定英語科）取得。

1933（昭和 8）年
10 月 1 日、親授待遇に列せらる。

1934（昭和 9）年
11 月 30 日、執行所出仕発令。親授三等に列せらる。同月、大阪相愛女子専門学校教授辞職。この年、外事課主任として琵琶湖ホテルに招かれる。

1935（昭和 10）年
この年、正徳寺日曜学校開設。

1936（昭和 11）年
4 月、琵琶湖ホテルを退く。5 月 19 日、新設された本願寺翻訳課主事兼翻訳係主任となる。京都市下京区六条諏訪開町の本願寺役宅に居住。8 月 10 日、大阪教区会議員当選。この年、*Children's story of Buddha*（仏教童話集）刊行。

1937（昭和 12）年
8 月 31 日、命知堂事務取扱発令。9 月 9 日、「同朋慰問布教並ニ教勢視察」のためハワイ開教区出張を命ぜらる。10 月 1 日、親授二等に列せらる。12 月よりハワイ出張。この年、*Life of St. Shinran*（親鸞聖人略伝）、*The Shin Sect*、*Buddhist children's stories*、*Hymn of faith*（正信偈）刊行。

1938（昭和 13）年
4 月、ハワイより帰国。同月 *The Seven Spiritual Fathers*（七祖仏説）刊行。5 月 1 日、京都女子高等専門学校講師を兼ねる。

1939（昭和 14）年
11 月 10 日、Allex White に同伴し全国周遊旅行（～12 月 12 日）。この年、*New Buddhist Catechism* 刊行。

1940（昭和 15）年
11 月 2 日、第 2 回仏教徒大会（於築地本願寺）出席。

1941（昭和 16）年
1 月 29 日、「本山法要並ニ支那事変ニ関シ功労不少」により第二種表章三等一級を授与される。2 月 25 日再び龍谷大学専門部教授となる。3 月、興亜仏教協会より仏領インドシナ及びタイに派遣される（～7 月）。陸軍参謀本部嘱託として作戦準備のための宗教事情調査も兼ねた。8 月 11 日、京都放送局より「仏印ノ宗教事情」をラジオ放送。10 月、親授一等に列せらる。12 月 31 日、京都女子高等専門学校講師依

頼退職。この年、「高台教」（『顕真学報』第37号）、『対仏印宗教思想工作ニ関スル現地基礎調査報告』（宇津木二秀・久野芳隆著、陸軍参謀本部第八課編、同課）刊行。

1942（昭和17）年
1月7日、翻訳課勤務を解かれ興亜部勤務となる。

1943（昭和18）年
2月25日、平岡貞と共に「宗教懇談会」を設立。この年、香港に渡る。

1945（昭和20）年
8月、香港で敗戦を迎え捕虜収容所へ収容される。引揚後、大阪で米穀関係の通訳を務める。

1946（昭和21）年
この年前後、龍谷大学に復帰する。

1947（昭和22）年
4月5日、三箇牧村長となる。この年、宗教平和会議の本願寺派協議員に推薦される。

1950（昭和25）年
この年前後、光華短期大学に出講。

1951（昭和26）年
1月13日、三箇牧村長を辞す。7月17日、病のため死去。

---

1 『凌雲山正徳寺表門、太鼓堂解体修復落慶法要を記念に　付　正徳寺累代系譜』（高槻：正徳寺、1991年）。

2 1937年12月3日付神智学協会々長C. Jinarajadasaへの返信（資料no.10207）。ただし遺族の方によると、その事実は不明とのこと。

3 岩田真美「高輪仏教大学と万国仏教青年連合会」2010年9月4日日本宗教学会第69回学術大会パネル（第11部会）「近代仏教／メディア／大学」での口頭発表のハンドアウトによる。

4 二十二の年譜に平安中学の校長より紹介を受けマクガヴァンより英語を学ぶとあり、「英国人、二十三歳」と年譜には記されている。従って、宇津木が個人授業を受けた「英国人」もマクガヴァンと思われる。

5 鈴木大拙は、マクガヴァンと天岫接三に1916（大正5）年4月3日か4日に鈴木大拙に出会ったと同年4月4日付ビアトリス宛の手紙で書いている。『鈴木大拙全集』36巻（東京：岩波書店、2003）p.397。桐田清秀『鈴木大拙研究基礎資料』（鎌倉：松ヶ岡文庫、2005）の同日の項によれば、大阪で開催された英語教師学会出席の途次と思われる。

6 吉永進一「ウィリアム・マクガヴァンと大乗協会」『近代仏教』18号（2011年）掲載予定。

7 宇津木が1928（昭和3）年に森川智徳らと連袂して龍谷大学を辞職する経緯は、『龍谷大学三百五十年史』通史編上巻（京都：龍谷大学、2000年）pp.652-660に記載されている。

8 『仏教年鑑』（仏教年鑑社）の該当年版を参照。

9 ウィリアムの妻Margaret McGovern（資料no.10234）が北京より出した手紙（日時不詳、1937年と推測される）。

10 昭和24年文部省学術局に提出した「新制大学実状調査について」の附録「教員異動書調」によると「文学科兼任講師宇津木二秀英語担当」とある（『龍谷大学三百五十年史』通史編上巻（京都：龍谷大学、2000年）p.908）。

11 『大阪府三島地方事務所誌』（大阪府三島地方事務所、1958年）p.6

12 月刊。発行Mahayanist Association。出版地Kyoto。所蔵は、vol.1 No.1~10, 12, vol.2 No.1（1915年7月～1916年9月）が確認されている。

13 発行The Theosophist Office。出版地Adyar, India。所蔵は、No.1~3, 5~8, 11, 14, 16, 17, 20, 21, 25~28, 31（1908年～1916年）。

14 発行Theosophical Publishing House。出版地 Adyar, India。所蔵は、No.2, 3, 7, 12, 15, 24, 25, 33, 47,61,71,76（1911年～1917年）。

15 発行The Theosophical Society Section Headquarters。出版地 Sydney, Australia。所蔵は、No.1～5。

16 ジャネット・マクガヴァンは離日後、台湾に赴き、日本人学校の英語教師をしながら先住民の中に入り込んで調査を行い、台湾先住民に関する人類学の著作Janet McGovern, *Among the Headhunters of Formosa* (London: Unwin, 1922)も執筆している。

17 ジャネットと神智学協会については、Joseph E. Ross, *Krotona of Old Hollywood* vol.1, pp.110-113を参照。また彼女の参加したもうひとつの結社についてはJames Santucci, "H.N. Stokes and the O. E. Library Critic "*Theosophical History* vol. no.6 (April 1986)を参照。ロスが引用しているウォリントンの手紙からすると、ジャネットとウォリントンやベサントとの関係はあまり良好ではなかったようである。

18 二十二鉄鎧「滞米五年の歴程」（同『遍路歴程』（福岡：二十二鉄鎧先生長寿記念会、1969）

pp311-317。

[19] Robert V. Hine, *California's Utopia Colonies* (Originally published in 1953)(Berkeley, CA: University of California Press, 1983) pp.42-47.

[20] ウォリントンの経歴についてはJoseph E. Ross, *Krotona of Old Hollywood* Vol.1 1866-1913 (Montecito, CA: El Montecito Oaks Press, 1989) Chap.1を参照した。

[21] Carey Williams, *Southern California: An Island on the Land* (Originally published in 1946)(Santa Barbara, CA: Peregirine Smith, 1979) p.254.

[22] クロトナをめぐる南カリフォルニアの霊的風土と文化については、前出Carey Williamsもしくは海野弘『癒しとカルトの大地：神秘のカリフォルニア』（東京：グリーンアロー、2001）を参照せよ。なおウォリントンに限らず、オルコットやジャッジ以来、法律家で神智学などの霊的思想に親しんだ例は多く、1910年代のロサンゼルスにはレイモンド・チャンドラーのパトロン役となったロイド（Warren Estelle Lloyd）がいる。フランク・マクシェイン、清水俊二訳『レイモンド・チャンドラーの生涯』（東京：早川書房、1981年）によると「ロイド家は当時のロサンゼルスではそれほど多くなかった上流社会にぞくしていた。金曜の夜の集いには、いつも、哲学と文学の話題がとりあげられた。ワレン・ロイドは法律のほかにもさまざまのことに興味を持っていて、『正常心理と異常心理』という本の共著者でもあった。当時、オカルトが人々の関心を集めていて、ロイド家でさかんだった話題の一つにインドの文学と哲学があった。彼らはマダム・ブラバツキーの影響をうけていて、また、ブルワー＝リットンの『ザノーニ』のような心霊現象をえがいた小説を読んでいた」（同書、p.74）とある。ロイド家は秘教思想家マンリー・P・ホール（Manly P. Hall）を援助している。また『正常心理と異常心理』の共著者、アニー・エリザベス・チェイニー（Annie Elizabeth Cheney）は平井金三を自宅に下宿させ、彼から仏教を学んでいる。このチェイニーの夫も法律家でカリフォルニア州の最高裁判事であった。

[23] Alfred Willis "A Survey of Surviving Buildings of the Krotona Colony in Hollywood" *Architronic* Vol.8 no.1 所収 (http://corbu2.caed.kent.edu/architronic/v8n1/v8n106.pdf からダウンロード可能)。

[24] 資料 no.10638。

[25] この公演は大好評で5週間に繰り延べされているが、これがハリウッド・ボウル（野外劇場）建設のきっかけになった。Joseph E. Ross, *Krotona of Old Hollywood* Vol.2, 1914-1920 (Joseph E. Ross, 2004) Chap.5参照。

[26] 宇津木は、今後学ぶべき本として10冊の書名を挙げているが、ケーラスなど英文の仏教研究書が3冊、英語の作文教科書が1冊、クリスチャン・サイエンスとバハイ教が1冊ずつ、残りの4冊はベサント、リードビータ、シネットらの神智学の著作であった。当時の、いわば「ニューエイジ」的な教養の範囲を示している。

[27] Adele S. Algeo "Beatrice Lane Suzuki and Theosophy in Japan." *Theosophical History* vol.11 no.3 (July 2005).

[28] 三田平凡寺の主宰する蒐集趣味人の集まり「我楽多宗」に出入りしていた。藤野滋『我楽多宗宗員列伝』（近江郷土玩具研究会、平成19年）22頁。その他、建築家レイモンド夫妻やインド人サバルワルなども我楽多宗と国際ロッジの両方に関係していた可能性がある。

[29] アルジオの表記では「Sarbarwal」である。谷崎潤一郎、志賀直哉などとも交流のあった独立運動家と思われる。1924（大正13）年10月11日、大谷大学でアーリヤ・サマージについて講演した模様。

[30] 秘教的なスウェーデンボルグ主義と大拙については Thomas A. Tweed, "American Occultism and Japanese Buddhism: Albert J. Edmunds, D. T. Suzuki, and Translocative History", *Japanese Japanese Journal of Religious Studies* vol.32 no.2 (Nagoya: Nanzan Institute for Religion and Culture, 2005)を参照のこと。ただしビアトリスの神智学とニューソート（いわゆるメタフィジカルと呼ばれる領域）全般に対する関心については、いまだ十分な研究がなされていない。

[31] 1930年8月4日付ビアトリス宛の書簡には、「それどころか、神智学協会は教義だけでなく組織も混乱しきっている。みなはもっと直接的で単純なものを欲している。しかし、私はクリシュナムルティはインド的すぎて、現代人の趣味に合わないと思う。彼は龍樹すぎるのだ。もっと建設的なものをもたねば。」とある（原文英語、吉永訳）『鈴木大拙全集』36巻 p.547。

[32] ビアトリス宛、1928年4月10日付の手紙で、宇津木の翻訳を持参して東京へいく予定と書いている（『鈴木大拙全集』36巻 p.482）。冊子は東京の三秀舎で印刷されているので、この冊子の原稿であり、訳者は宇津木と推測される。

[33] 大澤広嗣「仏教学者と南方進出――大日本仏教会

の仏印派遣」（『季刊日本思想史』第75号、特集「近代仏教」、責任編集林淳・大谷栄一、東京：ぺりかん社、2009年）。

[34]無署名記事「興亜仏教協会から南方諸国に視察員派遣」（『高野山時報』第949号、和歌山：高野山時報社、1941年1月19日）p.19。ただし引用文中にある杉岡規道の派遣は確認できない。

[35]無署名記事「仏印方面へ仏教使節／宇津木〔二秀〕氏語る」（『中外日報』第12451号、京都：中外日報社、1941年2月23日）p.2。引用に際して句読点を補訂した。

[36]東京大学東洋文化研究所編『東洋文化研究所の50年』（東京：東京大学東洋文化研究所、1991年）p.3。

[37]「最近の仏印・泰事情」は、帰国直後の1941年9月11日に、浄土真宗本願寺派の関係校である京都高等女学校（現在の京都女子中学校・高等学校）の講堂で行われた講演に際して、宇津木が準備した手稿である。

[38]前掲書、「仏教学者と南方進出――大日本仏教会の仏印派遣」、p.132。

[39]〔参謀本部第二部〕第八課編『対仏印宗教思想工作ニ関スル現地基礎調査報告』（第八課、1941年）。

[40]宇津木二秀「高台教」（『顕真学報』第37号、京都：顕真学苑、1941年）。

[41]前掲書、「高台教」p.84。

[42]前掲書、「高台教」pp.84-85。

[43]前掲書、『対仏印宗教思想工作ニ関スル現地基礎調査報告』、第1編p.6。

（2011. 1. 7受付）

Utsuki Nishu, an International-Minded Buddhist, and His Age

Shin'ichi YOSHINAGA, Mirai NAKAGAWA and Koji OSAWA

ABSTRACT : Utsuki Nishu (1893-1951) was a priest of Nishi Honganji sect as well as a professor of English at Ryukoku University. He studied English in America and Eruope from 1917 to 1922. He helped William McGovern to organize Mahayana Association, which tried to convey the teachings of Mahayana Buddhism to the Western World. Also he associated himself with Beatrice Suzuki and D. T. Suzuki to organize Mahayana Lodge of the Theosophical Society (Adyar, India). Before the W.W.II he was sento to the South East Asia to survey the religious situations there. During W.W.II he stayed in Hong Kong to start a religious conference of Buddhists and Christians. His name is not known even to the researchers of the history of modern Buddhism, but the rich documents he left in his temple are an important clue with which to see the unknown aspects of the process of Japanese Buddhism's internationalization.

Key Words : *William McGovern. M. T. Kirby, Ryukoku University, Mahayana Association, Theosophy, Kōa Bukkyō Kyōkai*